## 酪農実習

こんにちは、齋藤です。入社してから早くも１ヵ月が経ちました。今は先生方に随行して処置を見学したり経験させてもらったりしています。嫌な顔一つせず勉強させていただけていること、本当に感謝しています。一日でも皆さまのお役に立てるよう、今後とも精一杯頑張っていきます。

4 月 14 日から 25 日までの 12 日間、繋ぎの農場で酪農実習を行いました。全く牛と触れ合ったことがなく、もちろん搾乳作業もしたことがない全く使い物にならない私を、見捨てることなく育ててくださった農場主様とその奥様には感謝してもし尽くせません。本当にありがとうございました。

その 12 日間で感じたことをレポートにしました。是非読んでいただけるとありがたいです。

# 酪農実習を終えて

㈱トータルハードマネージメントサービス
1年目獣医師　齋藤 歩

4月12日から4月25日まで計12日間、酪農実習を行った。この12日間は日々新しいことばかりで、当初長く感じた実習も終わって振り返ってみれば本当にあっという間の12日間であった。これまで牛とほとんど関わることのなかった私にとってこの実習は、酪農家の仕事内容を学ぶだけではなく、牛が何を食べ、どんな行動をとるのかといった牛の生理についてのことや、酪農業を営む者の覚悟といったことまで、本当に幅広く多くのものを感じ取ることができる有意義なものであった。

## 作業の大変さ

まず何よりも身をもって感じたのは夫婦経営で営む繋ぎ牛舎の作業の大変さである。朝の作業は4:30～13:00までの約8時間半、夕方の作業は16:00～21:00までのおよそ5時間、これを毎日ほぼ休むことなく繰り返す。作業の間、休憩はほとんど無い。朝の8時間半の作業には、育成牛舎の掃除や搾乳、残飼処理、餌やり等が含まれる。どれも雑に行ったり何か工程を省いたりすれば、もちろん作業の時間は短縮される。しかしこの全ての作業を毎朝丁寧に行う。餌やりが特にこの丁寧さを際立たせ、サイレージにはカルシウム等いくつかの補助剤を添加し、その後エネルギーとなる配合飼料を3回に分けて種類を変えて与えている。「高泌乳量を出す牛たちにはそれ相応のエネルギーを与えてやらなくては」と話してくれた農場主さんの言葉に牛への強い愛情と尊敬を感じ、この牛に対する手の掛け方こそが一日平均個体乳量が30kgを超える決め手であると知った。

## 牛への愛情

この12日間の実習で最も深く考えさせられたのは牛に対する愛情である。実をいうとこれまで私は動物があまり得意ではなく、動物園でのように遠くで眺めているのが好きであった。これはこれまであまり関わる機会を持たなかったという理由からのものであるだろうが、動物を触り、また動物から触れられることにどうしても緊張を感じてしまう。それ故ある特定の動物に対して特別に愛をもって接することはこれまでしたことがなく、私の不安要素でもあった。

しかし、牛飼いである農場主さんからは本当に牛を大事に思い、感謝と尊敬の心をもって接しているのが強く伝わってきた。「牛を大事に考えて、命を奪ってしまったときに悲しむ、その心を牛と関わる者は無くしてならない」という力強い言葉が今でも私の心に残っている。

酪農業にとって牛は商品を生み出すそのものであり、彼らのもたらすものが経済的収入源となる。それにも関わらず、時に酪農家は機械のように自分の思い通りに動かない牛に対して苛立つことがある。これは誰しもが感じる仕方のない感情であり、私も実習中に幾度となく経験した。しかしその中でも、牛を大事に扱うか雑に扱うかでその農場の成績が分かれるだろうと考える。今回のように牛に愛情を注ぎ丁寧に扱えば扱うほど牛はそれに応えてくれ、管理のしやすさから作業の効率があがったり、個体乳量が増加したりする。

愛情をかけることは生き物を扱う仕事をするものにとっての義務でもあるだろう。実習の途中でお会いした酪農家さんが話してくれた「動物が好きでないやつは牛を飼う資格はない」という言葉は私に強く響くものだった。

12 日の実習を通して、毎日牛と関わり多くの作業をする中で私の牛と触れる際の緊張はストレスから、心地良い緊張感へと変わり少しずつ愛情もわいてくるようになった。体調が悪い時にはそのようなサインを出し、満足している時にはそのような表情を出す牛たちを見て、自分の作業の振り返りさえもすることができた。決して馴れ合うのではなく、適度な距離感を保ちつつ、尊敬と感謝の気持ちを忘れないことが牛にとっても、管理者にとっても非常に重要なポイントであるだろう。

実習を通して

何度も記述した通り本当に有意義で貴重な 12 日間であった。初めての牛との生活、初めての酪農体験でわからないことばかりだった私に、本当に丁寧に多くのことを教えてくださったS 農場さんには感謝しきれない。本当にありがとうございました。

また、奥様への感謝も忘れてはならないだろう。忙しい作業の中でも、いつも農場のフォローをする姿や、また日々のご飯、お風呂などといった家事をこなす姿は女性として憧れざるをえない像であった。また、実習生である私に対してもいつもきにかけてくださり、多くのフォローとサポートを頂いた。私が 12 日間、頑張り続けることができたのはまぎれもなく奥様のおかげである。本当にお世話になりました。

農場主の奥さんのサポートは、その農場の成績を決める鍵であるといっても過言ではない。

例えば子牛の哺育をとっても、女性だからこそ気が付く面や、女性ならではの子牛との接し方があるだろう。農場への奥さんの積極的な関与は、その農場に対して大きなプラスの因子となるであろうということは想像するに容易い。このS牧場の好成績もまた、奥さんによって支えられているのだろう。

この実習を通して、酪農に関わるものの本質、覚悟というものを感じ取ることができた。もちろん12日間という短い間でその全てを理解し自身にも身に着つけるということはできないが、その少しでも感じ、考えることができたのは自分にとって大きな収穫となった。これまで全くといっていいほど動物と触れる機会のなかった私であるが、これからは畜産業に関わる獣医師としての自覚を持ち、生き物である牛に対しての関心と尊敬を忘れずに仕事をしていきたいと思う。そして自分なりの牛との関わり方というものを構築できれば、と願う。

近年はロボット搾乳や餌押しロボットといった機械が動くロボット牛舎が注目を浴びており導入する農家さんも多い。また年々農場が大規模化しており、メガファームと呼ばれるような農場も登場するようになった。このような流れの中では、牛のことを生産機械と錯覚してしまうこともあるだろう。もちろん収入源を生産するのは牛そのものであり、時に機械と認識してしまったほうがやり易いこともあるだろう。しかしその中であっても、自分の中で構築した牛への愛情を忘れることなく関わってきたい。

この実習にあたって、S農場を営むお二方には丁寧かつ熱心なご指導を賜りました。ここに感謝の意を表します。本当にありがとうございました。

末筆ながらS牧場様のご繁栄とご発展をお祈り申し上げます。